

本論文では、パピアメント語の形態統語論について詳細な記述をした。

第 1 章では、パピアメント語とその話者に関する一般的な情報を提示した。その中、話者の数とその物理的な位置について述べた。先行研究のうち重要なもの 2 つまとめた。それらは、1) パピアメント語の文法全体の特徴を簡潔に説明した Kouwenberg and Murray (1994) と、2) Departamento di Enseñansa Aruba (2010), Luidens et al. (2015), and Velásquez et al. (2016) という 3 冊からなるアルバの研究者によって書かれたパピアメント語の 1 つの文法書である。3 冊からなるアルバの文法書は Kouwenberg and Murray (1994) よりも広範なものであるが、文法に対する規範的なアプローチをとっている。そのほかに、筆者が分析に用いたデータを紹介するとともに、本論文を通して使用している転写の慣習を簡単に説明した。

第 2 章では、形態統語的な特徴に基づき、各語類の大まかな定義を行った。各節では、興味深い現象や、場合によって、それぞれの語類に属する例外的なものを紹介した。ある単語は名詞になったり、形容詞になったり、副詞になったりする。これらの 3 つの語類の間にはかなりの流動性があり、その違いはほとんど構文上の位置によって決定されているようである。動詞は構文上の位置と音韻構造によって他の語類と区別される。代名詞は人称代名詞、指示代名詞、疑問代名詞、関係代名詞、不定代名詞に細分化した。疑問代名詞に従属節化標識 *ku* とコピュラ *ta* を組み合わせると、不定代名詞と同等の意味を表すことができることが分かった。指示冠詞 *esun* 「そのもの」、*es(u)nan* 「それらのもの」の特徴を説明した。前置詞にその意味によって、複合前置詞の場合はさらにそれを形成する要素によって特徴を分類した。(通常「TAM マーカー」と呼ばれる) 動詞句の内部に現れる小詞と、接続詞、間投詞を紹介した。

第 3 章では、パピアメント語の形態論を記述した。動詞に見られる屈折の一種である音韻変化について言及した。また、分詞や属格を形成する接辞を紹介した。これらの接辞は動詞の語源、すなわちスペイン語・ポルトガル語由来か否かによって大きく左右される。そのほか、*a-*のような生産性の低い接辞が一見無関係な複数の語に出現することの説明もした。接語に関しては、パピアメント語では文法語が接語化する傾向があることを指摘し、例を挙げた。

第 4 章では、句と節の特徴、およびその構成要素を示した。このうち、名詞句と動詞句は数多くの要素を含んでいる。名詞句は、名詞核 (NC) とその修飾語に分けることができる。第 3 章で定義した複合語と擬似複合語の中には、1 つの NC として機能するものがある。名詞句は、その定性によって、異なる修飾語を持ったり、まったく修飾語を持たなかったりするという特徴を有している。NC が表すものが複数として解釈されるか単数として解釈されるかによって修飾語の選択が左右される。動詞句は、動詞核と複数の修飾語を含む。動詞格に含まれる動詞によって、斜格項が義務的に現れることがある。これらの要素は周辺項 (PA) として機能する。PA は前置詞句または補文のいずれかである。節は通常、主語と動詞を持つ。それらは無標の節の構成要素である。無標の節のほかに、明白な主語がない非人称節がある。命令節は明白な主語を持たない傾向にあり、動詞や周囲の要素によって、動詞が命令形になることがある。補文節と関係節は、どちらも従属節の一種である。補語節は、その導入に用いられる従属節化標識・補文標識によって分けられる。関係節は必ずしも従属節化標識・補文標識や関係代名詞を必要としない。

第 5 章では、2 つの文法的カテゴリを記述した。それらは、テンス・アスペクト・モダリティ (TAM) とヴォイスである。TAM はパピアメント語では小詞や補助動詞の複雑な体系によって表される。これらの要素の組み合わせと従属節におけるそれぞれの要素の特殊な意味合いがパピアメント語文法の最も複雑な側面の 1 つとなっている。これまでの研究では、パピアメント語の受動態と再帰態については完全に説明されていたが、使役態についての説明はなされていなかった。筆者は使役態で用いられる補助動詞の違いおよび、従属節化標識 *ku* の有無による意味の違いを説明した。

第 6 章では、文法現象の否定、疑問、焦点化、および多動詞構造を記述した。そこでは疑問代名詞と疑問副詞の特徴を詳しく説明し、パピアメント語の付加疑問文の種類をまとめた。さらに、多動詞構造に関して記述をした。多動詞構造は軽動詞構造と動詞連続構造 (SVC) を含む。軽動詞構造の最初の動詞が後続する動詞を修飾するものであるが、その動詞がもたらす意味が曖昧であることがある。一方、SVC には、複数の動詞句が接続詞なしに次々と現れる対称型 SVC と、両方の動詞が

1つの動詞句内にあるものに分けられる。後者は動作とその結果を表す結果型 SVC と、特定の方向への何らかの動きを表す方向型 SVC に細分化できる。

第7章では、パピアメント語の全体的な特徴を述べるとともに、他のクレオールと、パピアメント語に影響を与えた他の言語に見られる類型的な特徴との対照を行った。これらの言語には、パピアメント語の基層言語（のちにパピアメント語話者となった多数の人が本来話していた言語）、上層言語（パピアメント語の語彙の大部分を提供した言語）、パピアメント語話者の多くが住む ABC 諸島において威信のある言語であるオランダ語が含まれる。パピアメント語は、他のクレオールと多くの特徴を共有している。しかし、パピアメント語の SVC は他のクレオールに見られるようなパターンを許さない。パピアメント語の基層の1つであると考えられるフォン語 (Fongbe) と対照したら、両言語に見られる SVC はかなり異なっていることが分かった。ABC 諸島に住むパピアメント語話者は、パピアメント語の上層言語の1つであるスペイン語と、オランダ語の影響を大きく受けている。前者は慣用表現に多く用いられ、後者はコード切り替えによく用いられる。パピアメント語にはオランダ語の分離可能な動詞の翻訳借用がいくつかある。

第8章では、本論文で扱ったトピックについて簡単な結論を述べている。